

Contents

1) 健康心理学コラム vol. 66 岡村 尚昌 (久留米大学高次脳疾患研究所)

1) 健康心理学コラム Vol. 66

「胎児期と乳幼児期のストレス」

岡村 尚昌 (久留米大学高次脳疾患研究所)

胎児期・乳幼児期の過度なストレスにより、脳の神経細胞の形態変化が引き起こされることがや、出生後の記憶や学習機能、情動機能に決定的な影響が及ぼされることが知られています。ラットやサルを対象にした研究では、母親が妊娠中に繰り返し心理社会的ストレスを経験したことで、多くのコルチゾールに暴露された胎児では、ストレスに対する生理学的及び行動的応答の調節機能が破壊されることがや、免疫機能が低下することが明らかにされています。研究報告は少ないですが、ヒトにおいても妊娠中における母親の心理社会的ストレスの頻繁な経験が、乳児から大人までのストレスに対する脆弱性に影響することが報告されています。

さらに、乳児から幼少時期にかけて脳機能が著しく発達する時期に、養育者から虐待などの過度なストレスを受けると、成長後も視床下部・脳下垂体・副腎皮質(HPA)系と視床下部・交感神経・副腎髄質(SAM)系の機能亢進が持続することが明らかにされています。その結果、ストレスに対する感受性が高まり、虐待を受けた時期のみならず、思春期、青年期そして成人期に至るまでその影響が続くことがわかっています。

現在、胎児・乳幼児期の過度なストレスを経験した子どもに対して、具体的な支援法を構築することが求められています。そのためには、胎児・乳幼児期に経験した虐待などの種類や受けた年齢や期間、その後に罹患した精神・神経疾患、成人になるまでにおかっていた環境や状況などの多くの心理社会的要因との関連性を生理心理学的に明らかにすることが望まれます。これらを科学的に解明することができれば、現代社会のストレスや健康に関わる問題に大いに貢献できると考えます (岡村, 2018)。

文献

岡村尚昌 (2018) 第17章 胎児期・乳幼児期のストレスとストレス応答 室橋春光・芋坂満里子 (編) 生理心理学と精神生理学 (3巻) 北大路書房。

日本健康心理学会広報委員会

<http://jahp-public.blogspot.jp/>

メールマガジンの配信停止、アドレス変更は下記アドレスまで

日本健康心理学会事務局 <[jahp-post@bunken.co.jp](mailto:jahp-post@bunken.co.jp)>

メールマガジンへのご意見・ご感想は下記アドレスまで

広報委員会 <[jahp-ML@bunken.co.jp](mailto:jahp-ML@bunken.co.jp)>

過去のメールマガジンは、こちらからご覧いただけます

<http://jahp.wdc-jp.com/health/health1.html>